

## ●あとかき——別府俊幸

DYNAUDIOのユニットと出会い、ユニウェーブのサウンドもひとまずの水準に達した。これならこのスピーカにも決してひけを取ることはない。まだまだ不満は残されているが、ユニウェーブほど不満の少ないスピーカは他にはない。

これだけの音が出たのであるから、今までの経緯を振り返ってもよいだろう。その思いつきに高橋さん、アイエー出版の堀井さんの賛同を得て、本書をまとめるに至った

ご覧いただいたとおり、本書の大部分は『ラジオ技術』誌のリプリントである。これは図表、写真が多いために新たに書き下ろすことが難しいこと、時間の推移に沿ってユニウェーブの発展を辿っていただいた方がわかりやすいのでは、と考えたからである。いきなり“-12 dB/oct以上のネットワークはひずみを発生する”といわれたところで、過去のわれわれの記事を目にされていない方には、何のこともまったくご理解いただけないであろう。

まあ、発表より数年を経過した記事もあり、改めて読み直すと誤った解釈、未熟な仮説がいくつも見受けられる。

たとえば音源位置であるが、当初は振動板の位置であると考えていた。けれども、それでは聴感上納得できない。測定してみると、振動板よりも奥になる。調べてみると、私が知らなかっただけで、60年代にアメリカ音響工学会(AES)誌に報告があった、などである。

しかし、解釈の変遷は、われわれが歩みを続けてきた足跡であると、ご容赦いただきたい。また、現時点でも誤まった理解が多々残されていると思う。読者諸兄のご教示をお願いする。

なお、当たり前のことであるが、本から音は出てこない。もしもユニウェーブにご興味を感じていただけたら、

ぜひ製作していただきたい。製作例どおりに作っていただければ、製作例どおりの音が出るに違いない。不明な点など、ご連絡をいただければ、できる限りの対処をお約束する。ユニウェーブの6原則そのものは、すべて単純な方式にすぎない。しかし、そのすべてが聴感上、そして測定データ上、有効な手法である。音を聴いた上で、われわれの取り組みをご理解いただけたら、と思う次第である。

ところで、製作集として見ると、まとめた本人がいうのも大問題であるが、本書は欠陥品である。製作例のクオリティの開きが大きいのである。第3部に8機種の製作例を示したが、お薦めできるのはDYNAUDIOの2機種でしかない。

DYNAUDIO 17 W-75+D 28は、洗練された、気品のある音である。声の出た瞬間、細やかな表現力に驚かされる。月並みにいってしまえば、クリアな音である。が、“クリア”を主張するのではなく、どんなソースを鳴らしても、スピーカの音色を感じさせない“クリア”さである。トゥイータに比べると、ウーファは低域に独特のDYNAUDIOトーンがあり、いま一步である。が、音色のつながりは非常によい。

DYNAUDIO 20 W-75+T-330 Dは、さらに細やかな再現力を備えたシステムである。存在感を主張しないトゥイータを、テッド・マスとフェルトでさらに抑え込んだ、限りなくクリアな音である。ソプラノの表現力が違う。ただ、作った本人としては、すこしコントロールしすぎたかな、もう少し荒れさせた方がおもしろいかな、という気もある。ウーファは、これもDYNAUDIOトーンが感じられるが、このトゥイータと組み合わせるにはベストであろう。音色が統一されている。

どちらを試みられるかは、財布と相談して決めていただいで結構である。どちらにしても、自信を持って最高品位の音とお薦めできる。

ユニウェーブMは、しばらくの間リファレンス的存在であったのだが、この2機種と比べると、トワイタの解像度が劣ってしまう。にもかかわらず、ユニットのコストはそれほど変わらない。

もしも、もっとも安く試みられるのであれば、ラ技オリジナル・ユニットがある。さすがにクオリティは落ちるが、それでも「ユニウェーブ」の音場感を持っている。あるいは、コスト・パフォーマンスとして見ればベストの機種かも知れない。

「ユニウェーブといったところでリニア・フェイズと何がちがうんだ」とお考えの読者もいるだろう。

最後に、リニア・フェイズとユニウェーブの違いについて、もう一度述べておきたい。われわれも最初は「リニア・フェイズ」と呼んでいたし、70年代に一世を風靡したリニア・フェイズ・スピーカも、同じようなシステムであろうと考えていた。

しかし「リニア・フェイズ」とは、「音源位置を揃えた」だけのシステムであり、「ユニウェーブ」のように、入力と相似な波形を出力しようとするシステムではない。それぞれのユニットからリスナー（マイクロフォン）までの距離を等しくはしたものの、「ネットワークひずみ」は手つかずのまま残っていた。であるから、われわれのシステムを「リニア・フェイズ」と呼ぶのは不相当と考えた。そこでつけた名前が「ユニウェーブ」である。単一を意味するuniと波を意味するwaveを組み合わせた造語である。もちろん、ランダムハウスにもOEDにも載っていない。

ユニウェーブは、連続波による周波

数特性だけを考え、1つの波の信号を入れたときに2つも3つもデタラメな波を発するマルチウェイ・スピーカとは、まったく異なった目標を持つスピーカである。

## あとがきのおわりに

ウィーンの国立オペラ座で、友人が会ったおばさんの話である。

立見席の柱の横（当然のことながら舞台は見えにくい。したがって人が集まらない）に腰を下ろした彼女は、ひたすら目を閉じてオペラを聴いている。ときどき立ち上がり、チラリと舞台を見やっては、また座り込んで聴いている。背伸びして一生懸命舞台を見やっている立見客とは、別世界に遊んでいるようだ。

幕間に話を聞けば、彼女はオペラが大好きなのだそうだ。ほとんど毎日のようにオペラ座に出かけては「聴いている」という。舞台は「前に見たからわかってる」し、見なくても「みんな話は知っている」。地球の裏側からガイドブック片手にやってきた東洋人に、「近ごろは演目が有名だと歌手がおちる」とか、「今日のモーツァルトよりも昨日のシュニトケの方がいいソプラノが出ていた」とか、「このごろいいテノールが出てこなくてね」などと文句を並べる。「ヤーパン（日本）にもオペラはあるの？」と尋ねる。しかし、彼が答える前に一人で答えてしまう。「でも、やっぱりここで聴かなくちゃね」。

（友人は尋ねなかったのであるが）もしも彼女に「家でもオペラを聴いているの？」と尋ねれば、どう答えたであろう。おそらく答えはこうだろう。「ステレオなんて持ってないわ。ここに来れば毎日聴けるのだから」。